

日本子育て学会研究プロジェクト推進委員会研究交流委員会
企画シンポジウム「コロナ危機における臨床相談援助および
子育て体系化への構想」2020年11月21日（オンライン開催）

コロナ危機における ICTと子育て学習・ 子育て支援学の体系化

話題提供者

西村美東士（若者文化研究所）

<http://mito3.jp>

コロナ危機における子育て学習

子育て学習においては、専門領域のなかで体系化された学問からの演繹的な講義方式による「集団一斉承り学習」のためなら、自分のペースで在宅学習できるICTは大いに役立つはずといえよう。

しかし、実際の子育て学習の場においては、そうはならない。コロナ危機において集合できない、会話できないという身体的・精神的制約が、これまでのとりわけ「水平交流ワークショップ型」の子育て学習の可能性を押しとどめてしまうマイナス要因となっている。

ここでは、とりわけ子育て当事者による「親子共同まちづくり研究」の事例に焦点を当て、これまでの子育て学習が生み出した成果を整理する。

I C T と子育て学習・子育て支援学の体系化

これまでの子育て学習の成果とは、①異質の価値の受容、②暮しと仕事のなかでの課題発見と課題解決、③「自閉」や「同調集団閉鎖」からの視野拡大、④関連して個人完結型から社会開放型への子育て観の転換、⑤自己形成と社会形成の一体的進展である。

私の話題提供においては、子育て学習のこれまでの成果を継承する I C T 活用のあり方を提唱するとともに、これまで本学会が進めてきた子育て支援学の体系化を「くじけずに」いっそう推し進めるための展望を提唱したいと考えている。

提唱したい I C T 活用の要点は、「書き言葉文化」の復活、自己内対話の充実、見知らぬ他者・異質の他者との交流であり、そのための学習者への評価付与、揺さぶり、新たな課題提示などの、指導者によるワークショップへの効果的な介入である。

構成

1

- 1 子育て支援はコロナに敗北するのか

2

- 2 ICTによる子育て学習

3

- 3 ICTの可能性と子育て支援学体系化

4

- 4 子育て支援学体系化に向けた取り組み

- 1 子育て支援はコロナに敗北するのか。

「新しい生活様式」がワークショップに与える影響

- WS（ワークショップ）で、リアルな空間での共感と共有の時間がもてない。
- ◆ WSの特徴を台無しにしてはならない
- ◆ 一部のWSファシリテータの努力の実際と本質的限界
- ◆ 問題はアイスブレイキングの話ではない
- ◆ 本質は、自己内対話と対他者対話の相乗作用、異質との出会いによる相互理解と価値の創造
- ◆ ただし、ソーシャル・ディスタンスで、これまでの「同調圧力」から救われる人もいる

ICTによる子育て学習の課題と展望

1. 「新しい生活様式」による弱体化の恐れ
2. 「自分のペースで学べる」という良さを生かした個人学習の支援
3. 「子育て暗黙知」のマルチメディア教材作成
4. ICTによる「ママ友づくりパパ友づくり」
5. 「異なる価値との交流」による自己内・対他者対話
6. 「（教育が）意図的につくる居場所」

校区を超えた小学校PTA会員の言わば「動員」された研究グループによって生み出された子育て学習の事例

西村美東士「社会開放型子育て観への転換プログラムの提案－豊島区家庭教育推進員の子育てまちづくり研究活動を通して」

<http://mito3.jp/seika/2870.pdf>

子育て暗黙知「保育者の行動の仕方」



子供の観察

年齢による特性をまず考える、事実を受け止める、なぜそのようになったか分析的に見る、子供の心情を理解し、共感する、子供の発想・思考の流れを読む、何が起こるかを予測する

どうなってほしいか

目標は明確に示す、この年齢の子供として妥当な目標を描いてやる、親としての願いや想い・期待を理解して示す、特にしつけるべきことをわかりやすく到達可能な範囲で明示する

どこにどう
働きかければよいか

子供が受け入れやすい形を作り出す、必ず成功する定石ともいえる方法を採用する、いくつかのケースを想定して対応の仕方を用意する、自然の道理・人間行動の原理にあわせて組み立てる、方法は必ずあるという前提で考え出す

実際に働きかける

子供の目線で行動する、共感し共有できる方法を生み出して実践する、相手中心に考えその子供にとっての前進は何かを実現する、場合によっては理屈でわからせることも使う

平成17年度選定文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業(社会連携研究推進事業) 連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究一個人完結型から社会開放型への子育て観の転換をめざして平成17~21年度研究集録

子育ての暗黙知に関する研究

— 子供を見る視点と子供への対応を中心に

森 和夫 (技術・技能教育研究所)

西村 美東士(若者文化研究所)

図表 3-3 場面③場面③「玩具を奪い合う」「転倒して泣く」における行動の背景

場・子供・状況	到達目標	手段と計画	運動・行動
<ul style="list-style-type: none"> ・年齢が近いのでトラブルが起きやすい ・慰めているけれど自分も悪くないと主張している ・自分も興味があったからと主張している ・痛くて泣いている ・3歳までは譲ることができない年齢 ・自分のものは自分のもの 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己主張できる ・気持ちの切り替えができる ・どんなときに危ないかを知る ・他の人に譲ることを知る ・自分の希望を出しながら、互いにどう折り合うかがわかる 	<ul style="list-style-type: none"> ・やりたかったんだという気持ちがきちんと受け止めてもらえば、また、チャレンジできるので気持ちも変わっていく ・これくらいの年齢では抱きしめてあげるとよい 時間ではなくて、瞬間でもよい ・大丈夫って聞くと、ちょっと痛くても、声をかけてもらおうと我慢をすることもある ・ここは登ると危ないねと言わないといけないときは言う。痛がってこけたときに、登っちゃダメなのよとは言いません ・交代の意味を言い聞かせる ・代用品を与える。 ・納得させる ・気分転換させる 	<ul style="list-style-type: none"> ・こどもの主張、言いたいことを受け止める ・「痛かったね」と共感する ・抱きしめる ・気持ちを他のものに向けるようにする ・かわりばんこを言って聞かせる ・似たような玩具を与える ・言い聞かせて納得させる

比較相手 アイテム	金	夫	仕事	趣味	ママ友	子育て	得点	順位
金→								番
夫→								番
仕事→								番
趣味→								番
ママ友→								番
子育て→								番
一対比較法：比較相手より重要なら○、ほかは×						計	15	

「親子まちづくり研究」に向けた提言

校区を超えた小学校PTA会員の言わば「動員」された研究グループによって生み出された[東京都T区「親子まちづくり研究」](#)の事例

西村美東士「社会開放型
子育て観への転換プログラムの
提案

－豊島区家庭教育推進員の
子育てまちづくり研究活動を通
して」



- 1 豊島区関連政策：すべての人が地域で共に生きていけるまち・多様なコミュニティがあるまち
- 2 実践研究テーマ：異年齢・異文化の交流が共生のまちづくりに与える影響
- 3 メンバー：

4 目的と方法

異年齢・異文化の人々が参加するイベント(お話し会、手遊び、童謡など)を開催することによるコミュニティづくりの効果を明らかにする。

以上の目的のために次の仮説を設定した。

【地域で行われる異年齢・異文化イベントに参加することにより、地域コミュニティに対する理解が深まる】

研究方法1：イベント参加者へのインタビューと自分たちの振り返り

①メンバーとその子どもたちによる区民広場「南大塚納涼まつり」への参加と参加者聞き取り調査(80名)

8/22(土)、内容：盆踊り、阿波踊り、巢鴨っ子連体操、スイカ割り

②メンバーとその子どもたちによるミニ縁日への参加と振り返り

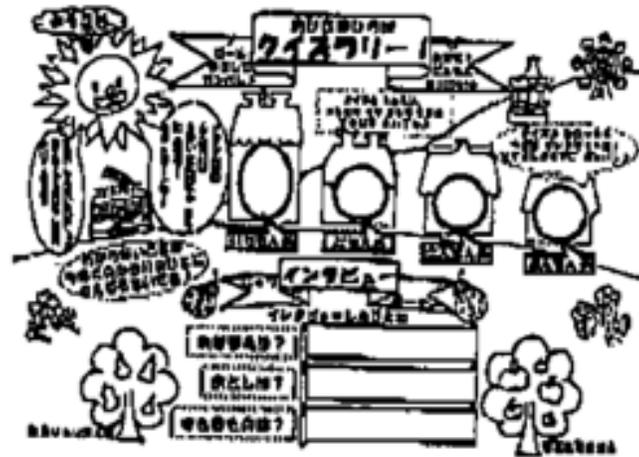
国際交流イベント(代々木公園ナマスティンディア・日比谷公園グローバルフェスタ)

研究方法2：地域イベントの主催による、参加者同士が必ず声をかけ合う内容のゲームの実験

①区民広場「南大塚納涼まつり」における実験

11/7(日)、内容：お茶席、バザー、子ども服リサイクル、お話の部屋、工作、コーヒーとパンの販売、リズム体操、わなげ、オバケたたき、皿回し体験、スライム屋、舞台発表。

われわれはクイズラリー(インタビューゲーム)を実施した。これは、「人間の体の不思議トリビアクイズラリー」の最後の問題として、盛り込んだものである。参加者が、自分の年齢よりプラスマイナス30歳以上の参加者(海外出身の人を含む)を探して、話しかけ、「名前」、「年齢」、「好きなものや好きなこと」を聞き出し、解答用紙に記入してゴールで提出する。ゴールした人に、メンバーとその子どもたちが聞き取り調査を行った。



結論

- ① 従来通りのイベントを繰り返すだけでは、異文化・異年齢の人々同士が積極的に関わり合う機会としては十分ではない。
- ② 地域コミュニティにおいて、同じ集団内でのつながりは強く、交流も盛んに行われているが、同一集団の単位を越えた交流を図ることや、それに関する各集団のニーズを把握することは、住民の力だけでは困難である。
- ③ 区民ひろば運営協議会など、それぞれのコミュニティの運営に関わる人々、とくに高齢者や子育て世代や住民ボランティアの一部の人たちに負担がかかりすぎている。マンパワーが不足している。

ICTの可能性

GIGAスクール構想等によるICT環境の整備

2015年の「地域学校協働」中教審答申による「学校で学んだことを地域に応用するような関係をつくる」、「地域の在り方も変える」という考え方

親、市民、学校、行政、事業所の協働がもたらす個人完結型子育て観から社会開放型子育て観への転換

そのためのICTの発揮する大きな役割

・ 3 ICTの可能性と子育て支援学体系化

ICTの可能性

ICTに期待される書き言葉による発信と合意形成
パソコン通信の先駆者の事例

自己内対話と対他者対話が行われ、既存の解答を昇華した新しい解答を見出すことが可能

大学授業でのアクティブラーニングの事例

交流と合意形成を阻害するネック
= 個人情報保護と著作権の尊重

自負できるプライバシー、二次利用されたい著作権



・ 3 ICTの可能性と子育て支援学体系化

ICTに期待される書き言葉による発信と合意形成

第一に、パソコン通信は「書き言葉文化」なので、慣れるまでは少し「しんどい」読み書きの作業が強いられる。最初は電話のような気軽さはない。とくに自己の思考を文章で表現することは、つらいものである。「読み・書き・算」のうちの一つも能力が求められる。真の意味での「学力」の不足は、ここでは直接的に影響し、その人の情報行動を消極的にしてしまう。

ただ、青少年の場合は、「交換ノート」のような「ノリ」で気軽に読み書きしている。これが、新しい「書き言葉文化」を形成しつつある。

第二に、(中略)

情報の処理・交流能力や読み書きの能力の獲得を、それが困難であるという理由で放棄するわけにはいかない。むしろ、ROMの存在に象徴されるパソコン通信の「困難」は、そのまま、今後の情報化社会において人間に必要な情報リテラシー獲得のための、そして人間が知の主体として生きていくための、乗り越えなければならない知的試練としてとらえるべきではないだろうか。

・ 3 ICTの可能性と子育て支援学体系化

ICTにおける自己内対話効果と対他者協同効果

他学生の記述をリアルタイムに一覧形式で見ることができることは、とくに大人数授業場合は交流ツールとして有効であると考えられる。しかし、その交流が、自己内対話の遮断として機能する場合も考えられる。今回の結果からは、自己内対話効果と対他者協同効果の分離が示唆された。キャリア教育に多用されるワークショップの場面において、学生の協同（課題設定等）→沈思黙考（カード書き込み）→口頭コミュニケーションによる協同（カテゴライズ作業等）→協同・沈思黙考（振り返り）というプロセスに関して、ICT活用分析を通して、自己内対話と協同の相乗的促進のための、評価付与、揺さぶり、新たな課題提示などの教師の指導行為の方法と効果を検討する必要がある。

西村美東士「ICTを活用した学科キャリア教育の方法と効果」、
聖徳大学FD紀要『聖徳の教え育む技法』7号、pp.63-73、2013年2月
mito3.jp/seika/3040.pdf

・ 3 ICTの可能性と子育て支援学体系化

「自負できるプライバシー、二次利用されたい著作権」

もうひとつ先の段階に、生涯学習社会の移行途中の今日、突出的空間として見え隠れしている水平異質共生のコミュニティがある。それは、「私はこれだったら得意だから、みんなに教えてあげるよ」という生涯学習ボランティア、「こういうことを考えたからアップロードしておきます。よかったらぜひこれをほかにもどんどん紹介してください。著作料（財産権）はいりません。でも出所は私であることは明らかにしてくださいね（氏名表示権）」という情報ボランティア、そういう人たちが創り出している生涯学習空間および電子的仮想空間の世界である。アマチュアによる知的生産や情報発信にはそういう強みがある。ぼくは、これを、「自負できるプライバシー」および「二次利用されたい著作権」と呼んでいる。上下同質競争に飽き足りなくなつて、この競争社会の世では当然と思われてきた権利である自己のプライバシー権や著作権を、自分の意思で必要に応じて守ったり開放したりするという自己管理のできる市民のボランティアリズムが、突出的水平空間においては生まれつつあるのだ。

1997/3/31西村美東士「社会教育関係者にとっての電子メールの存在価値－自負できるプライバシー、二次利用されたい著作権の誕生」、財団法人AVCC『平成8年度文部省補助事業生涯学習関連施設調査研究報告書』より

三位一体の研究方法

1. 本学会での取り組み = わが国の子育てに関する社会的課題を取り上げ、そのテーマに対して、諸学の各領域を超えて、保護者、支援者、研究者の三位一体で追求していく活動
2. WS等によって、保護者の見解を含めた子育て課題の洗い出しと検討を進める
3. それぞれのテーマ（課題）について、子育て現場の保護者、子育て支援現場の支援者、各領域の研究者の三者の能動的な協働によって、複数の専門領域を横断する検討と課題解決の方法が必要

[西村美東士「2017年度日本子育て学会第9回大会サテライト大会報告—子育て者の思いに応える子育て学を目指して—」](#)

mito3.jp/seika/3750.pdf

■ テーマ群

・関連学問と関係付けながらアプローチする。

子育て支援の社会化
行政の支援のあり方

保護者の参画
官民連携

子育てまちづくり
子育て商品開発

食育、給食、絵本、読書
親子のストレスと心の病い
障害児の子育て

子育て・子育て学習の構造
コミュニケーション力の欠如
親力低下問題

疫病、震災復興、PTSD

格差拡大・プアーチャイルド
無職青年

子どもの居場所
親の居場所
虐待・DV・ケア

■ 理念研究

■ 歴史研究

子育ての
学的体系

■ 研究方法・手法群

文献研究
フィールドワーク
実験研究
アクションリサーチ
調査法、インタビュー、アンケート
ケーススタディ
ワークショップ・討議

■ 分野・領域・
研究対象

親、親同士の関係、母と父
子ども、子ども同士の関係、友達
家族、親子関係、兄弟、親戚

地域、まち、家族

公民館、地域センター、図書館、博物館、青少年相談、
少年センター、児童福祉センター、保健所、少年院、サ
ポートセンター

学校(幼少中高大)、保育園、学童保育、児童館、青年
の家、塾、専修・各種

クラブ、団体、NPO、子ども会、青少年団体

子育て支援センター、センターオブセンター
病院、産婦人科、小児科、心療内科

■ 関係する学問群

体育学、レクリエーション学

小児保健学、生理学、小児医学、地域保
健学、母子保健学、母性看護学

食育、成長発達、栄養改善学コミュニケー
ション学、人間関係学

発達心理学、教育心理学、障害児心理学、
家族心理学、教育相談学、カウンセリング
学
教育社会学、子ども社会学

社会福祉学、障害者福祉学、子ども家庭
福祉学、司法福祉学

都市計画、建築学、子育て環境、子ども環
境学、ユニバーサルデザイン、安全教育

「親の自己形成」と「子育ての
社会形成」の両面からのアプ
ローチが必要である。

生涯教育学、産業教育学、社会教
育学、教育経営学

教材、玩具、遊具等

しつけ学、倫理学、愛情学、
ジェンダー学、保育学

行政参加、行政学、市民活動、ボラ
ンティア学、NPO学

日本子育て学会「子育て学の学的体系の構築」研究全体図(案)

西村美東士

少子化インパクトの軽減

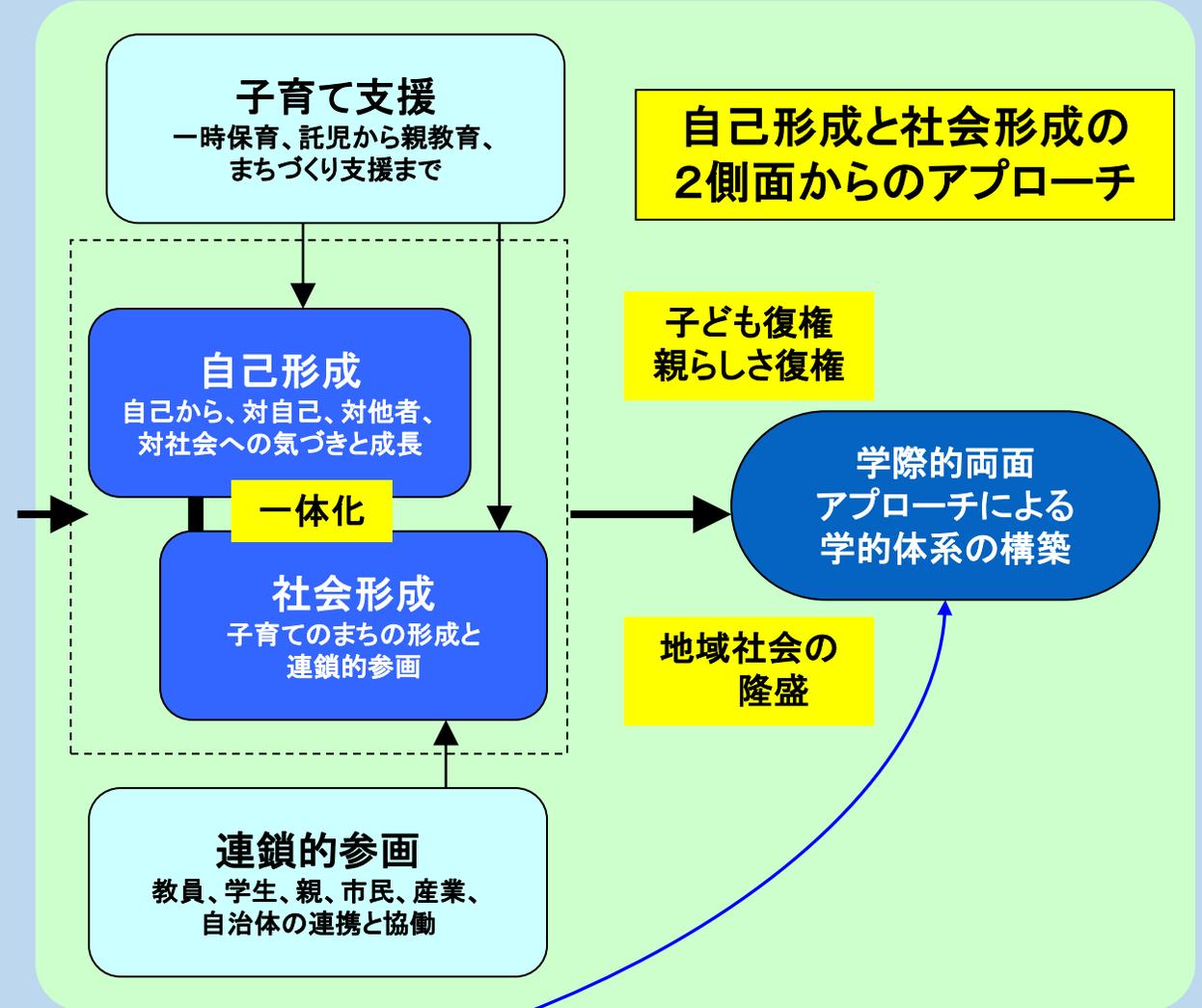
親にとってのかけがえのない子育ての時期を、
子育てとともに、より充実したものになりたい。

研究方法(例)

「生身(なまみ)の親」の
ニーズを出発点として、「個人として」と
「社会の成員として」の両面から包括的に
アプローチする学的体系の
構築が求められている。

- 研究1
「ワンストップ子育て相談
によるニーズの構造化」
- 研究2
「参画型ワークショップによる
課題と能力の構造化」
- 研究3
「学際的子育て文献・事例
データベースの構築」
- 研究4
「実験子育て講座のプログラム
及び教材開発」

社会開放型子育て親への転換によって、「花の生涯」を実現したい



・ 4 子育て支援学体系化に向けた取り組み

ネットやSNSを気軽に使いこなす若い親たち

・ ネット、SNSなどの活用に関する問題：

今回のサテライト大会では、「ママサークル」を立ち上げようとしている保護者の新規参加があり、SNSなどを活用した新しいかたちで社会に関わろうとする動向が保護者のなかで見られた。その人たちは、ネットやSNSを気楽に使いこなすことによって、社会的活動を行っている。今日の若者にとっては、それは技術的にはたやすいことであり、未来の親として、社会に開かれた子育てを進める可能性をもっている。

前ページ「[西村美東士「2017年度日本子育て学会第9回大会サテライト大会報告—子育て者の思いに応える子育て学を目指して—」より](http://mito3.jp/seika/3750.txt)

<http://mito3.jp/seika/3750.txt>

・ 4 子育て支援学体系化に向けた取り組み

体系化のカギになるもの

教育学の研究者でさえも、わが子の子育てに悩み、価値観を同じくする「ママ友」とだけつながろうとして、個人完結型の子育て観に閉塞していく傾向を見受ける。これだけ子育てが私物化している今日、社会開放型子育て観への転換は、簡単ではないのだろう。

しかし、子育て支援学体系化を成功させるカギは、保護者が「わが子」だけではなく「子育てのまち」に目を向けること、支援者が「わが園」だけではなく「全市的視点」をもつこと、そして研究者は自分の研究領域だけでなく、人々の暮らしや仕事ぶりの総合的観点から、地域の子育ての課題を臨床的に分析することだと考える。

それが、わが子を「私物」ではなく、社会の一員として「正しく見る」ことにもつながるのだと、私は考えている。